

巻頭言—2つの特集をめぐって

附属経済研究所所長 井上 泰夫

『国際地域経済研究』第15号では、研究所員によるプロジェクト研究の推進状況を示す3篇の論文に加えて、2つの特集を組むことができた。以下ではこの特集について簡略に説明を行いたい。

第1の特集は、「名古屋経済圏の現状と課題」に関わっている。寄稿論文の著者は本研究科社会人大学院の卒業生であり、昨秋上梓された塩見治人・梅原浩次郎編著『名古屋経済圏のグローバル化対応—産業と雇用における問題性』（見洋書房、2013年）の執筆者である。本書は、同じ編者による『トヨタショックと愛知経済—トヨタ伝説と現実』（見洋書房、2011年）の姉妹編である。これらの共同研究は、塩見治人氏（本学名誉教授、現在、名古屋外国語大学国際学部国際ビジネス学科長）が本研究科の社会人大学院卒業生の有志とともに「日中経済学術交流会議」（本学経済学研究科と中国社会科学院日本研究所との提携事業、1997年から現在まで5回開催）を母体とする研究会を組織されたことにさかのぼる。今でこそ社会人大学院はごく普通の存在になっているが、26年前本研究科において全国の大学に先駆けて社会人大学院が設置されて以来、名古屋市大経済学研究科社会人大学院はとくに院生の研究意欲が高いことが当初からの特徴になっている。修士論文、博士論文を提出したのちにも、研究論文の執筆に熱心な有志たちを輩出している。塩見名誉教授は、これらの人たちの熱い研究意欲を真正面から受け止めて、先の日中経済学術会議を含めて、手弁当で共同研究を推進されてきた。その成果が先の2著作であり、今号の第1特集のベースになっている。2011年発行の『トヨタショックと愛知経済』では2008年リーマンショック後の愛知経済の分析が中心になっており、話題性を集めることができた。これに対して、2013年の『名古屋経済圏のグローバル化対応』では、リーマンショックの背景にある世界経済のグローバル化が名古屋経済圏に今後どのようなインパクトを引き起こすのか、それにどう対応するのか、に分析の焦点が置かれている。一過的な話題に終わるのではなく、地域経済の長期的展望のなかで15篇の個別分析が展開されている。そこに共通するのは、いかにしてこの地域で従来のような雇用水準を確保し続けることができるのか、というテーマである。本著の「はしがき」で塩見氏が述べられているように、「名古屋圏への政策提言を直接には行っていない」が、それを「すでに起こった未来（ドラッカー）」として提示しようという問題意識である。詳しくは同書を直接参照していただきたいが、本特集を目にすることによって、産業と雇用（梅原論文）、外国人労働者の雇用（細川論文）、産業のグローバル化（岡田論文）、自動車産業の自動化と雇用（濱島論文）、飛騨地域・全国の観光産業（伊藤論文）、そして愛知農業の動向（井上論文）という幅広い分野について知見を深めることができる。

第2の特集「オーラル・ヒストリー—実践知とは何か」は、この年報の前号である昨年発行の第14号にさかのぼる。そこでは、附属経済研究所の第17回公開シンポジウム「21世紀の名古屋市を展望する」での個別報告が収録されている。これらの個別報告は公開シンポ当日の時間的に制約された個別発表を補完す

るものであった。だが、それでも紙幅は限られていた。そこで、今回、改めて、公開シンポのパネラーを務められた本学の特任教授の方々に、オーラルヒストリーの記録として、個別インタビューをお願いした。幸い4氏とも快くインタビューの申し出を引き受けていただいた。2013年9月末から2014年1月にかけて、長時間インタビューが行われ、そのあとテープ起こしの原稿にもとづいて、各先生方に手直しをお願いして、出来上がったのが本稿である。主催者側の不手際で録音したはずのインタビューがまったくのカラ録音で、再度インタビューをお願いしたこともあるし、テープから起こされた原稿に手を入れるのではなく、まったく新しく書き下ろしていただいた場合もある。

諏訪一夫氏、山田雅雄氏、吉井信雄氏、そして近藤邦治氏のインタビュー内容を目にしていただくとわかるように、そこでは、それぞれの専門分野での実践知が具体的に語られている。それはたんなる物語として終わるのではなく、学問知とのすり合わせが試みられている。大学、研究所は従来アカデミックな純粋の知の集まりであるとみなされていたが、学問知と実践知の融合性がますます重要になっている。同じことがらを学問的に議論するか、あるいはもっと実践的に議論するか、である。違う言葉で語っていても、同じことがらを議論しているということが起こりうる。4人の特任教授の方々はいずれも専門の個別分野で豊かな経験を積まれており、その経験に裏付けられた知がこれからの若い世代の人たちに後継されることを深く望みたい。